「駒澤大学と北京大学との学術交流」

シンポジウムの開催にあたって（レセプション挨拶）

この度、張帆北京大学歴史学部学部長、黄春高同副部長、王新生同学部教授、唐利国同学部教授をお迎えし、「近世・近代における日中文化交流―思想と文学に即して―」のテーマのもとに、シンポジウムを開催できますことは、誠に有難く、喜びに堪えません。

駒澤大学と北京大学との学術交流は2005年12月20日、交流に関する協定が結ばれたことに始まります。この12月で交流10周年を迎えることになります。この間に、北京大学歴史学系からは、宋成有・徐勇・辛徳勇・王新生・牛大勇・王暁秋の６人の教授を研究員としてお迎えし、本学からも文学部歴史学科・仏教学部の教員等を中心に多くの教員が講演や交流を深めるための会議等に北京大学を訪問いたしました。

また、シンポジュウムも開催されました。2006年11月9日には「東アジア地域における文化交流の過去・現在・未来」のテーマで、両大学から一人づつ報告者を出して、本学で行いました。さらに、2008年4月28日には、研究員として本学に在学した北京大学教員と駐日エジプト大使の報告を得て「東西文化の対話―中国と日本、エジプトと日本―」のテーマで開催しました。さらにまた、2009年12月18日には、「室町期における駐日交流」のテーマで、北京大学1人、本学2人の報告者を出して、本学で開催いたしました。

このような交流の深まりの中で、隔年で、しかも相互に開催することを基本にこれまでよりも大規模なシンポジウムを開催することになりました。第１回目は2010年8月27・28日、「東アジアの中における日中交流」というテーマで、北京大学で、10人の研究発表者を出して、2012年7月7日には、「日中間における交流の諸相―ひと・物・情報―」というテーマで、駒澤大学で、6人の研究

発表者で、そして、この度、2015年7月11日、北京大学の歴史学部学部長の張教授をはじめとする4人の教授をお迎えして、双方が2人づつ、計4人の研究発表者を出して、駒澤大学主催で開催する運びとなりました。隔年で、双方で交互にという原則は必ずしも、正確には守れませんでしたが、なお、昨年、2014年5月21日、本学に研究員として滞在されていました王暁秋教授に「幕末期中・日・米国間の交流における先駆者―羅森研究―」というテーマで講演をお願いし、討論を行い、シンポジュウム形式といたしました。今回で大きなシンポジウムは3回目、小規模なものを入れると７回目ということになります。

この間、交流の当初より、ご尽力いただきました王新生教授をはじめとする北京大学の教授陣に、深く感謝申し上げます。また、本学文学部歴史学科・仏教学部・国際センターをはじめとする多くの分野にわたる教職員の方々にも感謝申し上げます。

これまでの学術交流の道のりは決して平坦ではありませんでしたが、「学問に国境なし」の精神のもとに、困難を乗り越えてきました。現在も国相互の関係という点では、必ずしも良好とはいえず、厳しいものがありますが、このような時こそ、学術交流の面では、一層、深めて行かなければなりません。

申すまでもなく、両大学共に「知」の宝庫であり、「知」のカオスであります。また、すでに、歴史学の分野だけでの交流という壁は乗り越えて久しくなりました。宗教・仏教・歴史・考古学・文学・社会・グローバルメディア・法学等の分野に広がりを見せています。今後、両大学の交流は、学生の交流も含めて、多様に発展して行くことを確信しております。本シンポジウムがそのさらなる大きなステップとなることを期待したいと思います。

2015年7月10日

駒澤大学長　廣瀬　良弘